

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	中澤 芽衣
論文題目	ウガンダ南部の都市近郊農村における土地権利と女性世帯の生計活動		
(論文内容の要旨)			
<p>東アフリカ・ウガンダ共和国では、急速な人口増加と土地所有権の強化に伴い土地の資産価値が高騰し、土地不足の問題が深刻となっている。本論文は、そうした土地不足が進行する都市近郊農村における住民の移住履歴や土地所有、婚姻形態、生計活動を検討したうえで、女性が世帯主の世帯（以下、女性世帯）の生活実態と経済的な困窮から脱却するための営為を解明している。</p> <p>序章では、先行研究をふまえて、現代アフリカにおける現金経済の浸透、人口増加に伴う土地不足と貧困の問題、女性の土地権利の脆弱性に関する議論を記述している。ウガンダでは女性世帯が増加しており、男性との離別や死別に伴う男性労働力の喪失によって女性世帯の生活が困窮する危険性が高まっていることを指摘している。</p> <p>第一章では、イギリス保護領期以前から現政権までの土地政策の変遷について記述している。イギリスの保護領となる1894年以前、ガンダ王国の住民は家屋や畑を含む土地区画をチバンジャと呼んでいた。イギリスによる間接統治のもとで、ガンダ王国の土地は王領地とマイロランドに分類された。マイロランドは首長や軍人といった特権階級に分配されたが、彼らと先住の農家とのあいだで土地をめぐる争いが多発した。地主である特権階級に対して先住者の生存を保護するため、チバンジャは借地権という意味あいをもつようになった。</p> <p>第二章では、調査地K村の概要について記述した。K村は都市近郊に位置する農村であり、住人の多くは出身村や都市を離れ、村長から移入の許可を受けて移住していた。K村は多民族で構成され、世帯間の親族関係が希薄であるという特徴をもつ。</p> <p>第三章では、ウガンダの重要な主食作物であるバナナの栽培について記述した。バナナは自給作物であると同時に換金作物でもあり、都市では高値で取引され、住人の貴重な現金収入源となっている。多くの人びとはチバンジャでバナナを栽培し、その畑には墓地がつくられ、死者が埋葬されている。</p> <p>第四章では、K村におけるイギリス保護領期から2017年現在までの土地所有者の変遷を明らかにしている。村のなかには自由土地所有権と最長99年の土地リース権のほか、マイロランドに付与されるマイロ所有権と借地権「チバンジャ」が存在する。マイロ所有権や土地リース権、自由土地所有権の所有者は都市に暮らす富裕者であり、彼らは資産価値の上昇を見込んで土地を所有している。富裕者による土地の囲い込みと私有化によって、一般農家の使用できる面積は減少し、土地不足は深刻である。</p> <p>第五章では、借地権「チバンジャ」に着目し、農村の居住者が生存基盤としてチバ</p>			

ンジャを所有する重要性を提示した。住人はマイロ所有権の所有者に対して、一年間に一律5,000シリング（約1.5米ドル）という少額の現金を支払うことでチバンジャを永続的に使用し、多年生作物であるバナナを栽培できる。K村では、移入者の増加に伴い土地不足が生じ、チバンジャの売買価格は高騰している。移入者のなかにはチバンジャを購入できない多数の世帯が存在し、その多くは女性世帯であった。これらの女性世帯はチバンジャを転借して農業を営むが、バナナやコーヒーといった永年生作物の栽培が禁止されるだけでなく、高額な転借地代を請求されることもあり、女性世帯の多くは困窮している。

第六章では、住人の婚姻形態を分析し、婚資の支払いと離別・死別後の女性世帯への財産分与の関係を明らかにした。ガンダ社会において正式な婚姻関係を結ぶためには、夫方親族から妻方親族に婚資を支払うことが不可欠である。この支払いによって、妻は夫や夫方親族から財産を分与されるべき存在として認められる。しかし、夫との離婚時には、妻方親族が受け取った婚資を夫方親族に返却しないかぎり、妻は夫から財産分与を受けられず、再婚することもできない。2000年代以降、婚資の支払いがないまま同居をはじめめる男女が増加している。この同居はガンダ社会の慣習では正式な婚姻とは認められないため、女性は離別・死別時に男性から財産分与を受けることができず、厳しい状況に立たされていた。

第七章では、夫との死別や男性との離別後における女性世帯の生活再建の実態を明らかにしている。地方都市の発展による食料需要の高まりや農村における商機を積極的に活用し、女性たちはビジネスの空隙を探して軽食の販売で現金を稼得し、みずからのチバンジャを購入している。チバンジャにおけるバナナ栽培により、女性たちは安定した生活をおくることができる。

終章では、各章を総括し、農村社会における土地不足と土地権利について検討し、夫との死別や男性との離別後における女性世帯の生活再建の実態を考察している。現代ウガンダの都市近郊農村では、人口増加と土地の私有化に伴う土地不足は深刻な問題であり、チバンジャの所有の有無が食料の自給と現金収入の格差を生み出す要因となっている。女性世帯は男性世帯と比べると、土地権利を取得することは難しく、生活の困窮に直面しやすい。結婚時に夫方親族が婚資の支払いを済ませていると、夫の死後、妻に対して財産が分与され、その女性は安定した生活をおくることができる。一方、婚資の支払いの有無に関係なく、男性との離別によって女性は財産権を奪われ、社会的に孤立することもある。本論文は、女性世帯の安定した生活の再建には商機を見出すビジネスの展開とチバンジャの取得、所有地におけるバナナ栽培が重要な役割を果たしていると結論づけた。